

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき敷に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第146号

令和4年6月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第6回 現地学習

ゆかりの地として四條畷合戦陣跡を歩く

● 四條畷神社で正式参拝 ●

公開講座第6回の現地学習は、2月実施の予定がコロナ禍の影響を受け、3月に延期・中止となっていました。まん延防止措置の解除措置を受け、5月24日(火)に実施しました。

午後0時50分、四條畷神社境内休憩所に集合の上、全員そろって、四條畷神社で正式参拝をさせていただきました。

正式参拝後、本殿前で記念撮影を済ませ、最初に御妣神社に参拝しました。御妣神社は正成亡き後、正行ら子どもを育て上げた久子の方を慕う地元の方たちの強い願いにより、女性の鑑・子育ての神として創建された神社です。

境内には東西に2基の石像が鎮座しています。

本殿向かって右側に楠公父子像、そして左側に楠公母子像です。



楠公父子像は、桜井の駅で、「父死後、金剛山に籠り、天皇をお守りせよ」と遺訓を残し、正行を河内に帰したわかれの場面を描いたもので、楠公母子像は、正成の首級が届き、自責の念にかられ後を追おうとした正行に、「父は後を追えと言いましたか。貴方の務めは天皇をお守りすること」と訓戒をする場面を描いています。



四條畷神社階段を登りきったところ左右に石柱が建ち、「有孚」顯若」と刻されています。東洋最古の易経の一説で、「孚＝誠ありて、顯若(ぎょうじゃく)たるべし」と詠み、「神前に参るときの澄んだ心は誠があつて非常に厳かである。王は至誠の心と厳粛な態度で臨めば、民は自然と王を尊敬し、仰ぎ見る」との意です。

写真上:四條畷神社本殿前で記念撮影 下:楠公母子像の前で

次に向かったのは和田賢秀墓。かつて東高野街道は川崎公民館から和田賢秀墓の中を抜け、歴史民俗資料館前

に向かっていたことを説明しながら、カーツと目を見開いてなくなった賢秀が、字もtでは、敵にかみついたとの伝承が残り、歯が丈夫になる歯がみさんとして親しまれていることを紹介しました。

四條畷の合戦で、戦いの舞台になったといわれる「古戦田」字地が、四條畷市内に2か所残っています。

一ヶ所は旧法務局跡地付近から現在の四條畷保健所にかけての中野一带と、もう一ヶ所は、四條畷高校から小楠公墓にかけての雁屋地区に残っています。

ここでは、配布した資料に河内名所図会の2枚(「雁塚」と「正行墳」)を示しながら、当時、この辺り一帯がススキ野原であったことを想像していただきながら、隠し臥された敵の弓隊の放った矢にあたって正行、正時が負傷したことをお話ししました。

この辺りは、ススキ野原広がる湿地であったため、正行・正時は、適地を求め、権現川堤防上の大東市津の辺(「ハラキリ」字地残る)に移動、相刺し違えて亡くなりました。

小楠公墓所で

最後、小楠公墓所では、樹齢592年を迎えた大樹、クスノキを前にして、正平3年1348、正行死亡後、正長2

年1429に小石碑と2本の若楠が植えられたこと、その後クスノキが成長し二本の木が一本に和し小石碑を胎内に



包み込むと、天正12年1584、「南無権現」と刻まれた石碑が建てられ、元禄期にこの地を旅した貝原益軒が見たのはこの石碑であったこと、そして明治10年、全国の建碑運動とも呼ぶし、今も建つ7尺50センチの巨石碑が建てられたこと等を解説しました。

そして、敷地内に立つかつての四條畷神社の社務所の屋根瓦に刻まれる菊水家紋がすべて右から左に流れる「逆菊水」になっていることを見ていただきました。これは、正成亡き後、久子の方が再び楠氏の隆盛を願い、世の中の流れを変えようと、家紋の流れを変えたとの伝承が残っています。

お茶の差し入れ!

この日予期せぬ思わぬサプライズがあり、小楠公恩ぶ会の皆様に旧社務所で出迎えていただき、おいしい料理とお茶等をごちそうになりました。この日は暑く、全員疲れていましたが、お茶いっぱいで一気に元気を取り戻しました。ありがとうございました。紙面を借りてお礼を申し上げます。(写真 上から 和田賢秀墓 小楠公墓所クスノキの前で 熱心に解説を聞く参加者)

(文責：四條畷楠正行の会 代表 扇谷昭)